

「平成じゃないか体」宣言

第三回 学校をめぐる七つの誤解

橋爪大三郎

日本の学校がこんなに変になったのは、いつ頃からだろう。

昔の学校が、まったく変でなかったとは言わない。喧嘩やいじめもしょっちゅうあったし、よく思い出してみれば教師の学力もかなりお粗末だった。でも、どこか根本的なところで、学校はまだ一本芯が通っていたとは言えないか。こう言ってもいい。昔は、学校に行きたくても行けない人間のほうが、行きたくないのに学校に通っている人間より、何倍も、何十倍も多かった。昔の学校はなるほどみすばらしかったが、それでも当時の人びとにとって、およそ学校の名前のつくところはともかくまぶしく、なつかしく、それでいて厳かな場所だったのである。

その後、学校は増えた。増えすぎた。誰でもどこかの学校にもぐり込めるようになり、とうとう大部分の人間は、自分がなぜ学校に通っているのかわからなくなった。学校を成り立たせるその根底が崩れ始めた。いじめも、不登校（最近は登校拒否と言わないのだそうだ）も、家庭内暴力も、受験地獄も、偏差値信仰も、体罰教師も、ここから生まれていると私は思う。

日本の学校がおかしい。これを放置しておけば、日本社会はガタガタになってしまっただろう。

学校がおかしくなったのはなぜか？ それ避けようのない原因によるのなら、どうしようもないだがそうではなくて、それは、学校をめぐるさまざまな誤解・思い込み・勘違いが積み重なったものだ、私には思われる。それらの誤解を解いていくことが、日本社会を建て直すために、どうしても必要だ。そこで以下、教育の原理・原点にさかのぼって、学校再生の可能性を探っていくことにする。

1 誤解その一・人間は教育すればどんどん伸びる

日本人は千年以上もコメを作ってきたせい、手間ひまかければかけるほど、ものごとがうまく進

むと思っている。その連想で考えるのだろう。野球や算盤でも、練習に練習を重ねてついに神技の域に達した人間が、尊敬を集めたりする。教育も同じだ。親や教師が熱心に子供の面倒をみるほど、子供はどんどん伸びていくという考え方がわれわれの根底にある。子供が伸びないと、自分の教え方に問題があったのかと、教師は悩んでしまったりする。

親も教師も、子供のためによかれと善意でそう考えているのだが、善意がかえって問題をこじらせる場合もある。はっきり言えば日本人の場合、教育をすれば子供が伸びると、考えないほうがいい。教育は、宗教教育として始まった。日本人は、教育というとき、世俗の実用教育を思い浮かべるので、このことを強調しておきたい。

日本の近代教育は、大きく言って、二つの要素からなっている。ひとつは、東アジアに伝統的な儒教の教育思想。もうひとつは、キリスト教文明から生まれた西欧の教育思想。このふたつは本来、水と油の関係なのだが、どういうわけかごちゃ混ぜになって、戦後日本の教育をかたちづくってきた。どちらも中途半端なまま、日本人に都合のいいように解釈（改釈）されて、流通してきた。そこでまず、それぞれの発想の根本を押さえておくことにする。

一 神教の教育思想

キリスト教は、一神教のひとつである。一神教にはほかに、ユダヤ教、イスラム教があり、これらは同じ系統に属する宗教である。一神教には、独特の教育思想があって、近代教育の形成にも大きな影響を与えたので、まずこの教育思想について復習してみよう。

ユダヤ教は、世界で最初に義務教育の考え方を採用した。義務教育を一生懸命に推進したのは、紀元前二〇〇年ごろから台頭した、古代ユダヤ教の一派であ

るパリサイ派の人びとである。彼らは、新約の『福音書』のなかで、イエスから「杓子定規に律法を適用する偽善者」とさんざんに罵られているので印象が悪いが、もともとは民衆とともに歩んで神の教えを守ろうとする、法律家・教育者であった。当時のユダヤ教は、神殿での儀式を重視する祭司・貴族階級（サドカイ派）と、律法に従った規則正しい日常生活を重視する平民階級（パリサイ派）とが対立していた。神殿での犠牲など関係ない、神との契約を守ることが救済への唯一の道であると主張した革新者たちが、パリサイ派であった。そのため彼らは、各地の村々にシナゴグという名前の会堂を建てた。そして人びとに字を教え、すべての民衆が聖典（旧約聖書）を読み律法を守るように運動したのである。イエスが攻撃したのは、彼らの行き過ぎであった。田舎町の大工の息子・イエスの受けたのも、基本的にパリサイ派の教育だったと考えられる。

なぜ、教育が義務なのか？ なぜ、民衆が一人残らず字が読めないといけないのか？ それは、ユダヤ教の聖典が、「神との契約」だからである。神はアバートの家主であり、人間は間借り人みたいなもの。地球（アバート）に住むわれわれが、入居契約をよく読まず勝手にふるまったら、家主は怒らないであろうか。つまり、この場合の義務とは、神に対する義務である。

その後、ローマ軍がエルサレムの神殿を破壊してしまったので、ユダヤ教は事実上、パリサイ派の系統だけになった。以来二千年のあいだ、ユダヤ人たちは隣近所で集まって週一回聖書の読書会を続け、高い教育水準を誇ったのである。そして、彼らのあいだでリーダーとなるのは知識人、すなわち、聖書と律法と歴史に通じた、教養ある民衆の知的なリーダーであった。

◆ つぎにキリスト教だが、これはあと回しにして、先にイスラム教を見ておこう。

イスラム教は、ユダヤ教とよく似ている。イスラム教の聖典は『クルアーン』だが、これは神アッ

ラーがムハンマドを通じてもたらした啓示(神の言葉)＝契約である。啓示のなかでアッラーは、アブラハム、イサク、ヤコブの神であると自己紹介しているので、ユダヤ教の神ヤウエ(エホバ)と同一の神である。こうした神との契約は、人びとを拘束し、イスラム法となる。聖典「クルアーン」の翻訳は、ずっと禁じられてきた。そこでイスラム教徒たちは、アラビア語を学習し、「クルアーン」を暗唱し、ムハンマドのさまざまな伝承(ハディース)を収集・分析し、イスラム法の体系を整理する必要がある。そのため彼らは、世界で初めて大学を設立した。「クルアーン」や伝承に通じた權威あるイスラム法学者のもとで、世界中から集まった優秀な青年たちがイスラム法を学ぶ。そして故郷に戻り、その地域のイスラム教社会のリーダーとなる。こうして世界中のイスラム教徒が、共通の行動規準のもとに統合されるのである。

キリスト教徒の大学は、十二世紀のボローニャ大学が最初だが、イスラム教徒の大学はそれよりも数世紀早い。大学は、国際機関であり(地域社会から超越しており)、普遍的な知識(たとえばイスラム法)を教える。そうした機関を、人類大の組織された共同体を構築しようとしたイスラム教が最初に要請したのは、必然のなりゆきであった。

キリスト教は、ユダヤ教から別れた分派だが、ユダヤ教ともイスラム教ともあまり似ていない。それはキリスト教に、宗教法がないからである。ユダヤ法やイスラム法はあっても、キリスト法というものはない。イエス・キリストが、ユダヤの律法を批判した結果、律法を守らなくていいことになってしまったのである。ではどうすればいいのか。イエスは、ローマに税金を収めるように言った。パウロは、ローマの法律を守るように言った。要するに、そのときどきの世俗国家・支配権力の法律を守ればよいのである。キリスト教徒は神の国がくるのを待ち望む人びとで、もともと地上に関心がな

かったのだ。

キリスト教に、反主知主義的なところがあるのは、このためである。キリスト教徒は、宗教法のかわりに、イエス・キリストに依拠して救われようとする。字が読めなくても、キリストを信じることはできる。キリスト教徒は、「聖書」を読む必要さえなかったのである。誰もが「聖書」を読み、「聖書」を規準にしようという「聖書中心主義」が出てきたのは、ようやく宗教改革の頃である。

宗教法を勉強する必要のないキリスト教徒は、ルネサンスの頃まで、ユダヤ教徒やイスラム教徒よりもずっと学力が低かった。世俗社会は、宗教的なドグマで埋めつくされてはいなかった。しかし皮肉なことに、宗教法が不在である結果、かえってキリスト教社会は自然科学を発展させることができた。最初のうちこそ、聖書との矛盾を調整するのちよつとしたギクシャクがあったが、それ以後、自然科学が発展するのに、宗教的な理由にもとづく反対運動はないに等しかった。というわけで、キリスト教圏では、自然科学がついに教育の柱となったのである。

義務教育、大学、自然科学。こうした制度を発明したのは、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教といった一神教の人びとだった。最後に、一神教の教育思想の特徴をまとめておこう。

一神教は基本的に、神を絶対視する。言い換えれば、人間を相対視する。その結果、教育の機能を限定的に考える。

これはどういうことかと言うと、人格と学力とが分離するということである。教育は、人間から人間に対する働きかけ(人間わざ)である。いっぽう教育の効果は、人間の働きかけ(や本人の努力)による部分と、その人間のもって生まれた部分とからなる。もって生まれた部分は、言うならば神の恩恵である。神の恩恵に、人間は手を加えることができない。たとえば、天才。天才とは、教育(人

間わざ)では説明できないある人のもって生まれた優れた才能を、名づけたものだ。

キリスト教は、各人の霊魂が、救われるか救われなかが決定していると考える。一人ひとりの運命はばらばらであり、そのことに、人間は介入できない。人間の価値(霊魂のあり方)を、人間が決定することはできないし、そういう発想がそもそも許されない。そういう了解があるから、逆に安心して、堂々と学力を判定できる。学力が高かろうと低かろうと、それが人間の価値を決めるわけではないからだ。こうして、学力がそれ以外の価値から切り離されるからこそ、もっぱら学力を育てる、近代「教育」が成立しうる。

儒教の教育思想

これに対して、儒教は教育をどう考えてきたか? それにはまず、儒教そのものを理解すべきだろう。

儒教のテーマをひとくちで言うと、人民を統治する社会のリーダーを養成すること、これにつきる。では誰が、社会のリーダーとなるのか? それは、儒教の教養をわきまえた、知的エリート(知識人)にはかならない。彼らを選抜するため、科挙という名前の試験があつて、儒教の古典(経典)をどこまで身につけたかテストをする。この試験がめちゃめちゃにむずかしい。カンニング防止のため、試験場(一人一室)に三日間カンヅメにし、思い切り長い論文を書かせる。合格すれば、高級官僚としての前途が約束されている。

だから儒教は、教育を重視する。教育を受けなければ、試験に合格できず、政治家になれないからである。一族の誰かが政治家になれば、親戚や友人にもうまみが大い。かくして子供の頃から、四書五経の詰め込み教育に明け暮れる。

しかし儒教の教育は、しょせんひと握りの統治階級のためのものである。大部分の人民は、リーダーにおとなしく統治されていればいいのであつて、教育はおろか、字を読める必要もない。ユダヤ教と違って儒教には、義務教育の発想がなかった。

儒教には、義務教育の考え方がないのと同様、平等の考え方もない。むしろ儒教は、差別を道徳の柱にしているのである。父親に対する絶対的な服従。祖先崇拜。長幼の序。人間はまず、自分の父母を大切にす。つぎに、兄弟を大切にす。親戚を大切にす。そのつぎに、友人や知人を大切にす。……。見ず知らずの他人は、あまり大切にしないでいいのである。中国では、相手が誰であるか(自分とどういう血縁関係、社会関係にあるか)によって、行動様式が決定する。社会全体にわたって、こうした社会関係の網の目を成り立たせることが、儒教の役割である。ここに社会秩序の根本があるから、すべての人間を平等に扱うという考え方が成り立ちにくい。

儒教の社会秩序の根本は、親↓子の関係に置かれている。これは、①過去が現在の規準になる、②

ガスカール 緑の思考

P・ガスカール著 佐道直身訳 2678円
植物にまつわる個人的な体験から、フランスの歴史、パリの自然、失われゆく植物の危機的な現状など、人間と自然の関係についての独特の思索を展開する、ガスカールの哲学エッセイ。

世界樹木神話

J.プロス著 藤田・藤井・善本訳
ギリシア、ローマはもとより、ケルト、北欧、エジプト、インド、中国、シベリア、南米まで、世界各地の樹木にまつわる神話を探究し、樹木崇拜の真の意味を解き明かす。 3914円

植物の魔術

J.プロス著 田口・長野訳
食虫植物の秘密、驚異的な気候への適応能力、感情をもつ植物、最古の麻酔剤……私たちはまだ何も知らないのかも知れない。 2987円

八坂書房

東京都千代田区猿樂町1-5-3
目録 電話 tel 03-3293-7975
L保へ fax 03-3293-7977

人間が価値の規準になる、ということの意味する。これを中国社会の時間／空間の全体にわたって積分すると、聖人という像が結ばれる。聖人とは、過去の極限点に存在した、社会の規準となる人間（政治家）にはかならない。儒教の聖典は、つまるところ、この聖人の事績を現在に伝えるものである。それを現在に再生産するのが、儒教の教育の目的である。こうして儒教は、知識が次第に進歩発展すると考える近代科学と正反対の、保守的な性格を帯びざるをえない。

儒教は、結果の不平等を当然と考えるにもかかわらず（いや、それだからこそ）、すべての人間は教育によってどこまでも向上しうる、という前提から出発する。これは、教育の絶対視であり、儒教特有のドグマだ。するとただちに、教育によって向上しない（できない）のは本人がわるい、という結論が導かれる。本人がわるいのであるから、教育のあるリーダーに統治されるのが当然だ。こうして、教育の有無による階級区分——君子（統治階級）／小人（被統治階級）の別——が生じてくる。

儒教はこうして、統治機構（政治）と教育（文化）とが組み合わさった、巨大なシステムをこしらえた。それはあんまり中国の現実にフィットしていたので、何千年も中国を支配し、かえって中国を停滞させることになった。

日本人は教育をどう考えてきたか

日本の教育のルーツをたどると、儒教とキリスト教の二つに行き着く。これらは水と油みたいに、両立するはずのないものだが、日本人はそこに独自の要素をつけ加えて、両者をうまくミックスした。

日本の教育の独自の要素とは、①集団主義、②初等教育の重視、である。

キリスト教でも儒教でも、学力を身につけるのは個人々人である。儒教社会であれだけ科擧が權威をもち、カンニング防止にも熱心なのは、試験が一人ひとりの学力を個別評価するという前提があるか

からだ。この点は、人間が個別に救済される（されない）と考えるキリスト教の学力観と共通している。日本では、集団が生産の単位となるのが重視されるので、個人々の学力や業績を他から切り離して評価することに、抵抗がある。それよりも集団全体がそろって学力を向上させていくことのほうを重視する。

この点とも関係があるが、日本の教育は伝統的に、初等教育を重視してきた。読み書き算盤のような基礎学力を身につけていないと、一人前の人間として扱われない。幕末には全国津々浦々に寺子屋が普及し、驚異的な識字率を誇った。そのかわり高等教育機関（大学）のほうは、ろくなものがなかった。江戸時代を通じて、最高の知識人は、長屋で貧乏しながら弟子に教えるというのが通り相場だった。これは、初等教育などそっちのけでまっ先に大学を作ったヨーロッパ世界や、政治的リーダーを養成するためのエリート教育を重視した中国と、好対照である。

2 誤解その二・学校教育に責任をもつのは文部省である

江戸時代の寺子屋は、いちおう儒教をベースにしていた（千字文や論語をテキストにしていた）が、中途半端なものだった。日本社会が儒教の原則どおりにできていないのだから、当然である。武士はもう少し本格的な、藩校で学んだが、中途半端な点では似たようなものだった。

ある意味では誇るべき、寺子屋式民間教育の伝統は、明治維新によってみごとに断ち切られた。

明治政府の掲げた目標は、富国強兵だった。工場・学校・軍隊・政府といった近代的なセクターを作り出すために、それ相応の人材が必要となる。当然、教育の普及が急務となる。そこで（ここが明治期のリーダーの偉いところだが）、なけなしの国家財政をはたいて、全国の村や町に小学校を作っ

た。そして、子供は残らず学校教育を受けなければならないとした。国家百年の大計である。

これには相当、抵抗もあったらしい。うちは農作業で忙しい。猫の手も借りたい。子供を学校になんかやれるか。字が読めなくても喰っていける。そう言う親を説得して、無理やり子供を学校に連れてくる。小学校以外の教育機関も目の敵にされた。寺子屋は言うまでもない。ほかにも女紅場（じょこば）。明治の初めころは、簡単な読み書きや裁縫を教える、女紅場に通う女子も多かった（みんな和服を着ていた当時、裁縫は生活必須技術だった）。それをやめさせて、とにかく登校させる。これが義務教育の実態だった。

親の意向と関係なく、政府（文部省）の設置した学校で、子供を教育する。これでは、「親に教育権がある」という健全な発想が育つはずはない。その反対に、「教育はおカミがやること」「学校は文部省がつくるもの」という常識が定着していく。悲しいかな、これが日本の教育の原体験なのである。

「階層構成原理」としての学校

学校教育が国民のあいだに定着していくにつれ、それは、新たな社会的機能を果たすようになった。すなわち、学校が「階層構成原理」として働きはじめた。

明治日本は、江戸時代の身分的階層秩序（士農工商）をくつがえした、何でもありの社会だった。だが、階層がなくなったままでは、社会秩序を維持できない。そこで、どこでどれだけ学校教育を受けたかという「学歴」でもって、新しい社会階層をつくり出すことにした。身分差別をなくしたぐらだから、原則として差別はいけない。もし差別をするなら、理由が必要である。「むずかしい入学試験にパスした」「学歴が違う」は、立派な理由になる。当時はまだまだ、教育の機会（特に高等教

育を受ける機会）が限られていたから、これは差別を正当化する立派な理由になった。こうして限られた人材を、国家・社会のために有効に活用することをはかったのである。

旧制（六・五・三・三制）では、中学と高校の入試がむずかしかった。本来なら学校は入学させてからみっちりしごき、卒業試験がむずかしいのが理想の姿である。でも教育機会が限られている（学校が足りない）から、出口でなく入口でしぼらざるをえない。入学試験がむずかしいのは、後進国の特徴なのだ。

入学試験がむずかしいと、肝腎の学校教育が空洞化する。これは、世界共通の定理である。入学の時点で学力は証明されているから、なにもわざわざ教育するまでもない。日本の大学みたいに、遊んでいても卒業できることになる。単位を厳しくして卒業に待ったをかけたたりすると、「就職も決まっているのにひどい教授だ」と、スキャンダルになったりする。

問題は、こうした明治時代の学校教育の機能（階層構成原理）が、一世紀たったいまも大きな顔を

浅草ロック座 昭和末年

幻影的現実の在りか、大衆芸能の真実を求めて
勝山基弘撮影、ロック座の全プログラムを収録



文：池内紀十久世光彦十東八千代（座長）
25×25cm、フルカラー、総132頁、子価4,800円（税込）

永井荷風の哀切な人情劇「渡り鳥いづかへ」で知られる
ストリップ劇場の老舗「浅草ロック座」の
昭和末年から平成元年までの1年間の全プログラムを
漏らさずカメラに収めた執念の金字塔。
その華やかでかつはかないエロフィズムを、
哀惜を込めてたどるようもなくあえかに美しくとらえた
鮮烈の写真集。踊り子一覽表等文献データ付。

● 十二月中旬刊行予定。予約受付中

美術出版社
TEL 03(3234)2151
FAX 03(3234)9451

して居座っていることだ。

日本は豊かになった。教育の機会も増えた。大学進学率は頭打ちになった。つまり、もうこれ以上大学に進学しても無駄だとみんな思い始めた。それなのに、入学試験がむずかしく、どこでどれだけ学校教育を受けたかで、その人間の将来（就職や社会的地位や……）が決まりがちである。昔はごく一部の人のものだった入学試験に、いまはみんなが悩まされている。入試制度のおかげで、学校教育が危機に瀕している。日本の教育を根本からたて直すために、思い切った制度改革を行なうべき時期にきた。

3 誤解その三・いい学校の学生はいい学生である

どんな時代にも、よく勉強をする有能な「いい学生」がいるだろう。また、入学した学生の学力をぐんぐん伸ばす「いい学校」もあるだろう。このこと自体は、すこしもおかしくない。

おかしいのは、「いい学校にはいい学生がいる」（それ以外の学校にはいい学生がいらない）という常識が、まかり通っていることである。よく考えてみれば、もともと成績のよい学生を入学させて、成績のよいまま送り出しても、「いい学校」（よい教育を行なった学校）かどうかわからない。うんと出来の悪い学生を入学させて、そこそこの成績で送り出せば、それは確実に「いい学校」である。でも、日本人の常識では、そういうのを「いい学校」とは言わない。一流ということになっている大学や、そこに進学できる高校、そこに進学できる中学、……を「いい学校」と言うのである。

なぜ「いい学校」とそうでない学校、つまり、学校格差ができるのか？ 学校格差は、一種の病理現象である。学校格差が形成されるメカニズムを追ってみよう。

学校格差は、教師や親が教育のメカニズムをよく理解していないために、つくり出される。

まず教師は、生徒を平等だと信じたがっている。憲法も戦後教育も、平等を強調してきたからだ。もちろん、権利として平等（人格としても対等）なのだ。実際問題として、一人ひとりの生徒が同じだなどというものはありえない。もちろん学力も、まちまちだ。しかし、生徒の人格と学力とをすっきり分離できない教師は、なるべく成績による差をつけたくない。（なぜ人格と学力とが分離しないかは、さっきのべた。）成績に差があるのは、自分の教育が失敗したという意味になるし、人間の差別を肯定していいのかという気持ちにもなってしまうのである。

ほんとうは、生徒一人ひとりの学力をきちんと評価できなければ、教育など成り立ちようがないのだ。でも教師は、評価の根拠も正当性もないように感じがちである。

そこで唯一の解決は、学力の同じ生徒ばかりをひとつの学校に集めてしまうことだ。そうすれば、全員に同じような成績をつけていれやすむ。もちろんその結果として、学校と学校のあいだの格差がついてしまうけれども、そんなことは自分のクラスや学校の問題ではないから、知ったことではない。一人ひとりの教師がこう考えていると、全体として、学校格差は生まれやすくなる。また、いったん学校格差（「いい学校」が生まれかかると、それはほとんど拡大し定着していく）

日本では、同じクラスや学校のなかでの、生徒個人間の学力格差よりも、学校間の学力格差のほうが、はるかに容認されやすい。考えてみれば、これほど奇妙なことはない。

「いい学校」とは、学力のすぐれた「いい生徒」の集まる学校である。こういう評判が定着すると、生徒は、どの学校に通っているか（学校への所属）で、学力が判断されるようになる。

そうになると、親もじつとしてはいられない。自分の子供によかれと思うのが、親のつねである。「いい学校」があるなら、できれば行かせてやりたい。それが無理なら、せめてそのつぎに「いい学校」に行かせてやりたい。それでもできなければそのつぎ……というわけで、少しでもいい学校に行くための競争、つまり受験が激しくなる。

考えてみると、ここには錯覚がひそんでいる。別に「いい学校」の生徒であるから、自動的に「いい生徒」なわけではない。よく勉強して有能であって、はじめて「いい生徒」のはずである。どの学校にいても、「いい生徒」は「いい生徒」である。しかし、世間はそうは考えない。「いい生徒」ならもちろん「いい学校」に進めたはずである。それ以外の学校に「いい生徒」がいるはずがない、というのが、学校格差の世界なのである。

こうして、同じ大学、同じ高校、同じ中学なのに、一流／二流／三流……という格差が生じてくる。もちろんどの国にも、一流の学校も三流の学校もあるもののだが、日本の場合、それが受験と進路指導と「輪切り」現象によってがちがちに固められている点が、異常である。

4 誤解その四・学力だけで人間を評価するのは間違いである

高度成長を境に、日本の受験地獄の様相は一変した。

戦前にもなるほど、厳しい受験競争はあった。しかしそれは、ひと握りのエリートを選びだすためのものであった。大部分の国民には関係なかった。しかし戦後、進学率が上昇し、高等教育が大衆化すると、受験は変質した。それは、一部の者に教育機会を分配するものではなく、多くの者からよりよい教育機会（ということは、就職機会！）を奪うものに変質したのである。誰もが受験の渦に巻

きこまれ、そして、圧倒的に大部分の者はその勝者となれないのであった。なんと抑圧的な制度だろう。人びとが勉強動機（やる気）をなくしていくのも当然だ。

偏差値はなぜ万能か

偏差値教育が、これに輪をかける。

偏差値の本質を簡単におさらいしておく、これは標準偏差（統計学の概念で、平均からふつうどれ位散らばっているかという値）を10倍し、50を足したものだ。偏差値50なら、並みの成績。60なら上位三分の一以内、75なら百人に一人の好成績、という意味である。偏差値のおかげで、百発百中に近い進路指導ができるようになった。

なぜ偏差値を使うと、進路指導ができるのか？ それは、本番の入学試験の結果を、事前にかなり正確に予測できるからだ。

まず本番の前に、大がかりな模擬試験をやる。そしてその結果にもとづき、すばやく各人の偏差値を計算してしまう。模擬試験が、本番の入試の問題とそっくりにできていると仮定できれば、この偏差値は、ほぼ本番の入試の偏差値の代わりになると考えてよい。今年も去年と同じように受験生が大学を選ぶとすると、だいたいどれくらいの偏差値があれば合格できるか、予測するのは簡単だ。おまけに、どの受験生も偏差値ぎりぎりのところをねらって受験してくるので、少し偏差値が足りないと合格する可能性はぐんと低くなる。人びとが偏差値を信じて行動する結果、ますます偏差値が的中するようになるという「予言の自己成就」の構造がある。

ついでにのべておくと、偏差値の計算式は簡単でも、それを実際に計算するのはコンピュータが普及するまでとても無理だった。一九七〇年代になって、大手の予備校で使い始めた。これが爆発的に

普及したのは、共通一次試験以後のこと。全国単位の統一試験があつてこそ、模擬試験は威力を発揮する。学校ごとに試験の内容がまちまちでは、偏差値を計算しても、入試の結果を予測するのはむずかしいのだ。

偏差値は、模擬試験が可能な中学入試、高校入試でも威力を発揮、日本列島を完全におおい尽くした。

なぜ高校入試で、偏差値が絶対の尺度となるのか？

これには、いくつか前提がある。まず、入学定員の厳守。高校（特に公立高校）は、入学定員よりも多く採りすぎても、少なく採りすぎてもいけない。第二に、合格者の決定は試験の成績順である。第三に、学校は、階層構成原理を担っている。学力のある生徒は、どこの学校に行ってもいいはずだが、一番「いい学校」に行かないといけないのだ。

親も受験生も、少しでも「いい学校」を目指そうとする。いっぽう教師は、不合格（中学浪人）を減らそうとする。試験は本来、合格者／不合格者が出て当然だが（そしてそれは、親と受験生の権利であり責任であるはずだが）、中学の教師たちはそう考えない。全員合格してもらわないと困ると考える。そこで、受験者の人数を定員ぎりぎりまで少なくするように「進路指導」する。要するにこれは、自由市場に政府が介入する、行政指導の一種なのだ。

進路指導には、材料が必要である。そこで、偏差値が万能のパワーを発揮する。お子さんは、偏差値が足りませんね。これではA校は受験できません。C校にしなさい。

これだけでは、A校を受験してしまいかもしれない。そこで、内申書の出番である。教師の言うことを聞かないと、合格できない。そう思わせるのが、内申書だ。生徒を管理し進路指導を徹底させる

のに、これぐらい便利な道具はない。

内申書ほど有害無益なものも少ないが、なぜそんなものがこの世に存在するのか？

試験だけで合格が決まることに、しばしば反対の声が上がった。いわく、一発試験では力が出せない子もいる。平素の成績や学習態度も考慮すべきだ。いわく、学力だけで生徒を判断してはいけない。クラブ活動や人柄も評価すべきだ。偶然的要素を排し、全人格的な生徒の評価を重視する目的で、内申書（教師の作る報告書）が合格判定の資料に用いられることになった。

これはお間違いないである。入学試験は、学力だけを、一発勝負でみるどころがよいのである。だから不合格になっても、運が悪かったとか、学力は足りなかったがほかの面では負けないとか、考えることができる。その反対に、全人格的な評価で「劣っている」などと言われたら、まったく立つ瀬がなくなってしまう。しかも内申書を書くのは、教師である。もともと、人間が人間を「全人格的」に評価したりしてはいけないのである。試験であれば、教師がどんなに嫌っている生徒であろうと、い

鋭く感じ、柔らかく考える国際総合誌
【季刊】
アステイオン
'96
新年号
アステイオン
12月16日発売 定価980円 送

大特集 日本の不安
混沌の現代日本。私たちが見据えるべきものは？！
高坂正典／佐伯啓思／藤田清一／
養老孟司／筑紫哲也／グレゴリー！
クラーク／池田晶子／福田和也

【海外の坂原整回】
子供たちの地図……森まゆみ
自由は国の光かな……本田野恵
自由を愛した革命家……野田宣雄
【評伝】馬場恒吉の面目④……御野 貴
世間の常識・非常識⑥……大岡 玲
新連載 パリ・1930年代の光と影……今橋映子

TBSブリタニカ

年間購読料(季刊)3920円(税・送料込)
アステイオンの詳しい案内書、ならびに年間購読の
お申し込みは、ハガキで下記までご連絡下さい。
〒102 東京都千代田区三番町28-1
振替00110-4-131334 ☎03(3238)5721
TBSブリタニカ アステイオン(L)係

い点を取ってしまったらどうしようもない。つまり客観性がある。しかし内申書となれば、それは教師の主観(匙加減)そのもの。どうとでも書けるし、誰もそれをチェックできない。こういう教師の「権力」を公認してしまったおかげで、生徒は教師の「家来」となり、おとなしく管理されるだけの存在になった。

教師がこういった権力を必要とするのは、学校の教育機能が空洞化し、生徒の積極的な態度があてにできなくなったなかで、彼らをとまかく管理しなければならぬからだ。

受験に必要な学力は、塾や予備校に行かなければ身につかない。学校の授業は、同じことの繰り返しでうわの空となる。それでも、進路指導だけは学校が行っていたのだが、文部省の方針で業者テストが禁止された(なんと愚かな!)おかげで、学校は偏差値を入手できなくなった。仕方がないので、いままでも塾や予備校に縁のなかつた生徒まで校外で模擬試験を受け、偏差値を教えてもらっているありさまだ。いまや進路指導の面でも、塾・予備校が優位に立つことになった。

5 誤解その五・「いじめ」はいじめられる側にも問題がある

事態がここまでくれば、もはや「学校疎外」とよぶべきだろう。

十年ほど前、全国で荒れ狂った校内暴力は、学校疎外に対する生徒たちの怒りの表明だった。それがいま隠微に姿を変え、「いじめ」となって教室を蝕んでいる。「いじめ」は学校疎外のいき着いた果ての病理である。

たしかに昔も、いじめはあった。しかし昨今の「いじめ」は、学校文化のサブカルチャーとしてし

っかり根づいてしまっている。現代いじめのメカニズムを考察してみよう。

まず、日本の学校文化では、人格と学力とが未分化である。なおかつ能力別に授業をする態勢がないため(…児童は平等だ)、理解の遅い児童は、進度についていけない「落ちこぼれ」になりやすい。「落ちこぼれ」児童は、まったく自分の存在が認められないという、深い疎外感に襲われる。しかも、いたるところに偏差値がつきまとう結果、いままではほとんど誰もがそうした疎外感と隣り合わせなのだ。こうしたトラウマ(心の傷)は、学校の公然の場では癒されない。なぜなら、学校は競争の場ではなく、友愛と思いやりの場ということになっているにもかかわらず、個人に成績をつけているのは学校だから。そこで、傷つけられた自我を回復するため、隠れた祝祭空間を共謀して全能感を回復しようとする試みが行なわれる。祝祭には犠牲がつきものである。だから「いじめ」なのだ。学級委員が先頭に立ったクラスぐるみのいじめが続発するのも、こうした祝祭(いじめ=あそび)がそれだけ求められているということなのだ。

いじめはよくないと、もちろん教師は言う。それは建て前(偽善)だと、生徒は思う。いじめが日常化しているクラスの実態が真実であって、民主主義や人権や聞きあきた道徳律を持ち出す教師こそ実態から遊離していると、生徒たちは信じる。いじめはよくないけれど、いじめられる側にも問題がある。これは、生徒が自分たちを正当化する場合の決まり文句だ。この決まり文句に、教師も、いじめられる当人も、しばしば巻きこまれる。いじめられようとどうされようと、クラスに適応する以外ないのだ。

いじめられる側が、いじめの祝祭空間に積極的に同化している場合、それはあそびとほとんど見分けがつかない。消費社会のメディア状況(テレビ)が、これに輪をかける。テレビでは「面白ければ何でも許される」だが、いじめの祝祭空間ではその趣向が忠実になぞられるのだ。

「いじめ」は、教育の前提を根底からくつがえしてしまおう。

教育は、ことがまともな(字義どおりに)受け取られること、特に教師のことがばがそう受け取られることを、前提とする。ところが、いじめを常習とする学校文化のサブカルチャーに適応すると、ことがまともにも受け取れなくなる。このような若い人びとが量産されていることに、私は脅威を覚える。「いじめ」の実態について、内藤朝雄氏の論考「一九九五」を参照した。

6 誤解その六・学生は学生らしくすべきである

生徒の実態と行動原理が見えなくなった教師にとって、生徒は予測不能な「雑音」にはかならない。そこで彼らは、規律と管理を徹底させ、学校が相変わらず機能しているという外見を保とうとする。校則がそのための手段である。

日本の学校(特に、中学・高校)の校則には、顕著な特徴があり、これまでさまざまに論じられてきた。それらはほとんどが、校則を批判する言説だが、では、校則のどこが悪いのか。なぜそれだけ批判されながら、校則はなくならないのか。根本のところにある誤解は、放置されたままであると思われる。

ここでひとつの補助線として、たまたま入手できた、あるミッション系インターナショナル・スクール(中学校に相当)の校則を取り上げてみよう。これまで見慣れた校則と異なった、もうひとつの発想をそこに発見することができる。

校則の全文は、つぎの通りで、この上なく短い。訳す必要もないと思われるので、原文のまま掲げておく。

RULES FOR A HAPPY MIDDLE SCHOOL

so that our Middle School is a place where everyone is happy to learn in, WE ALL MUST:

1. RESPECT THE RIGHTS AND PROPERTY OF OTHERS.
2. NEVER KEEP SOMEONE ELSE FROM LEARNING.
3. NEVER SAY OR WRITE ANYTHING TO HURT SOMEONE.

ここに盛り込まれた思想のエッセンスをまとめてみると、

- ①校則は、市民社会と同じ規則でなければならぬ。
- ②教育の機会を重視する。

ブコウスキーの自伝的小説

くそつたれ! 少年時代

C・ブコウスキー 中川五郎訳

失業者の溢れるロスの下町を舞台に、父親との確執、容貌への劣等感等に悩みながら青春期を過ごす多感な少年の成長物語。最高傑作。

●2800円

文藝

1995 Quarterly the BUNGEI

文藝賞特別号 11月5日発売 ●1000円

第32回文藝賞発表

「選評」江藤淳

「受賞作」伊藤たかみ

大庭みな子・小島信夫

「助手席にて」ゲルゲル・ダンスを踊って

「優秀作」池内広明「ノックする人びと」

金真須美「メソッド」

第2回 連如賞発表

「嘆きよ、僕をつらぬけ」小沢美智恵

「ダスティターニー」我が樹木 道下匡子

河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
〒151 Tel.03-3404-1201

③ (ルールを守るという点において) 教師と生徒の区別がない。

④ 単純で、明快で、体系的である。

⑤ 規則の根拠が明示されている。

そして、おそらく何より印象的(そして意外)なのは、「あなたはこうせよ」というルールは一切なくて、「他人にこうしてはいけない」というタイプのルールばかりだということだ。

このことの含意を考えてみる。

学校の目的は、学習の機会を生徒に平等に提供することである。(学習の結果としての学力が身につくかどうかは、本人次第であって、学校は関知しない。)この目的のために校則が存在する。それ以上でもそれ以下でもない。この校則は、精神規定ではなくて実行規定であり、紛争(生徒と生徒の、生徒と教師の、……)が念頭におかれている。これらの規定は、具体的なケースが起こった場合に、裁定を下すための法源(裁判規範)としても用いることができる。

これらの規則は、禁止からなる。しかし、これらの禁止は、自己/他者が対等であるところから派生するものであるため、同時に自分の自由を保証してくれるものでもある。ホップズ以来の市民社会の構図が、この校則の下敷きになっている。この点、同じ市民である生徒と教師を区別する理由もなく、権利や財産といった概念を用いるのをためらう理由もない。校則を守ることで、市民社会の「法の支配」のロジックを学ぶことができる。

要するにこの校則は、「中学生は中学生らしく」といった、決まったイメージに生徒を押し込めることをまったく考えていない。(別に簡単な服装規定があるが、ぶらぶらしたピアスは危険だからいけないとか、高校生になるまで化粧はだめとかいった、一般社会常識に即した妥当なものである。)

7 誤解その七・校則が多いほど学校の規律が保たれる

これに対して、ほとんどすべての日本の中学・高校の校則は、教師から生徒にかけて命令(行政指導)のかたちをとっている。

法律が権力者の命令のかたちで与えられるのは、実は、近代以前の専制国家、特に東アジアに特有の伝統である。日本が中国から継受した律令も、そうであった。法律は統治の手段だから、権力者はそれを多くしたがる。いっぽう民衆は、法律などなければいいと考える。校則をめぐる教師と生徒の関係も、これと変わらない。

校則は管理の手段であるから、多ければ多いほど、また細かければ細かいほど、管理がうまくいく(生徒が言うことを聞くようになる)。実際に多くの学校で、校則がインフレのように膨張しているのを見ると、教師たちがそう信じているとさえざるをえない。

あんまりばかばかしい校則が目につくので、校則などなくしてしまえという声もある。それでは、校則がなければよいのであろうか?

学校から規則をなくしてしまうことは不可能であるし、不適當であると私は思う。教育の場に規則は必要だ。なぜなら、規則(≡制限)がないところには、権利(≡自由)もないからである。

自由とは、社会的に承認された、本人が意のままに行動できる領域である。自由には必ずある制限の垣根があって、それを踏み越えることはできない(たとえば、休み時間に校庭を飛び出して、よそへ行ってしまふことはできない)。しかし、垣根の内部であれば、どうしようと勝手である(校庭のどこに立っていようと坐っていようと、一切文句を言われない)。このような構造を体験しないと、

自由を理解できない。自由が理解できなければ、人格の独立も、他者の権利の尊重も、理解できない。要するに、市民社会にふさわしい行動がとれないのである。

したがって、市民社会のなかにある学校には当然、規則が必要だ。そしてその規則は、できれば市民社会の規則と共通な、そして、単純明快なものがいい。これを校則と呼ぶかどうかはまた別の問題だが、とにかくその意味での校則(学校の規則)は不可欠なのである。

校則の守られ方にも注意すべきである。管理のための校則は、それを生徒に守らせることに意義がある。だから教師は、検査し、監視し、体罰で脅し、必死に校則を守らせようとする。結果さえ規則どおりなら、プロセスがどんなに他律的であっても気にしない。いっぽう、教育のための校則は、「校則が守られている状態」よりもむしろ「校則がなぜ守られなければならないかを違反者が理解するプロセス」を重視する。人びとが主体的に規則を担わないのなら、規則は無意味である。校則違反は、規則の精神を修得する願ってもない教育チャンスでもあるのだ。

学校選択の時代

ところで、偏差値・管理教育のおかげで安泰を続けてきた学校ランキング・システムが、かすかに揺らぐ兆しをみせている。

第二次ベビーブーム(団塊ジュニア)が高校を卒業し、生徒数が減少に向かっている。ランキング・システムの最下層に位置する「底辺校」は、生徒募集が困難になって、倒産(閉鎖)するところも出てくるかもしれない。その上の「中位校」は、「底辺校」にランク落ちする恐れがある。ランク落ちしても、倒産するわけではないのだが、日本では教師の社会的威信が入学試験の難易度(偏差値)と連動しているから、学校側にとってこれはゆゆしい事態なのである。

そこで各校は特色を出そうと努力し、生き残り戦略に懸命だ。進学クラスを設けて受験学力の強化をはかったり、躰のきびしさ、英会話教育、センスのよい制服といった付加価値を目玉にして生徒集めをはかったりする学校もあるし、なすところもないまま他校の脱落を待っただけの学校もある。「上位校」ほど生徒の自主性をあてにできるので、自由な校風に特化しやすい。「中位校」は厳しい校則を売り物にし、「底辺校」はどんな生徒も受け入れると表明するなど、あの手この手で差異化をはかっている。

学校が生徒をふるいにかける受験戦争よりも、生徒が学校をはかりにかける学校生き残り戦争のほうが、ずっと正常な姿だし、教育の発展の役にも立つだろう。

偏差値・輪切りの学校ランキング・システムが安定しているあいだ、学校は教育を頑張ろうと手を抜こうと、生徒の募集にさしつかえない。毎年、定員は一杯の一定レベルの生徒が送り込まれてくる。よく考えてみれば(よく考えなくても)これは異常で、学校間の競争がはたらかない困ったシ

『ドンキホーテ』

創刊準備号(FYTT 1月号別冊)

1996.1.5 発行pp.53 学習研究社

おまけ

橋爪大三郎

「橋爪大三郎の社会学講義」(発売中 夏目書房・1800円)は「社会がわかかって楽になる」という本。「大問題!」(発売中 幻冬舎・1400円)は「社会科学で楽になるエッセイしよう」という本。「科学技術は地球を救えるか」(発売中 富士通ブックス・2200円)は新田義孝氏と地球環境問題を徹底討論した対談。



伴野 啓
『魂の密着』

システムだ。受験は、生徒に平等な進学機会を保証するための制度である。裏を返せば、学校に不断の競争と、教育の質の向上を義務づける制度なのだ。受験を憎む教師たちが、進路指導によって競争をなくしてしまえば、教育の質の向上がどこかに行ってしまうのは当たり前である。

生徒減少が減少しはじめて、偏差値・輪切りのシステムにガタがきた。だがこれは一時的な足のひっ張りあい、偏差値ランキングのなかでの小競り合いだ。どうせ競争をするなら、どれだけ偏差値の高い入学者を集めるかでなく、どれだけすぐれた教育をするかという中身で、徹底した競争をやってほしい。

教育をよみがえらせるために、いまできること

やたら校則が厳しく、生徒を厳重に管理する学校よりも、自由な校風で自発的に生徒が勉強する学校のほうがよいことは、誰だってわかっている。しかし「上位校」以外でそんなことをすれば、生徒がたるんで收拾がつかなくなると、現場の教師たちは考えている。

自由な校風が「上位校」で成り立つのは、生徒全員に、学力の優位を（他校との比較において）認める余地があるからだ。その結果、一人ひとりが多少個性的でも、それは容認できるとみなされる。つまり、学力と人格が分離できる。

ポイントはこちらだ。

学校が確固とした教育方針・価値観をもって、学力と人格を分離できれば（学力と独立な観点から生徒一人ひとりの価値をはかることができれば）、学力を伸ばすための教育が機能する。たとえば、塾を考えてみればよい。塾には別に、厳しい「校則」もないし、体罰教師もないが、暴力もいじめもなくうまく機能している。それはなぜかと言えば、①嫌なら来なければいい（その場にいらない自由

がある）、②いかに学力を伸ばすかに集中している（ほかのことが問題にならない）、③自分の学力にあわせた授業が受けられる、からである。同じことを、学校ができないはずはない。

◆ 進学成績を伸ばすため、多くの学校が、進学クラスを編成している。最近、体罰によって女子高生を死亡させた、九州の私立女子高校も、一学年10クラスのうち2クラスが進学クラスだった。そんな区分けをされたのでは、残り8クラスの生徒はやる気がなくなってしまう。「いい学校の生徒はいい生徒」という発想がこびりついた教師が、「いいクラスの生徒はいい生徒」を、学校のなかで作り出そうとしているのだ。

◆ そんなばかばかしいことをやる暇があったら、こうすればどうか。たとえば――
午前中か午後の一時間目くらいまでに、高校卒業の必修単位の授業をそろえる。どの生徒も、この単位をとれば卒業できる。それがすんでから、夕方までの時間帯に、受験準備のための特別授業を用意する。これは完全な選択制（自由参加）で、費用も別に（科目ごとに）払い、しかも高校の成績にかぞえないようにする。要するに、受験学力を伸ばすための教育を、高校の正規教育（卒業単位）と切り離すことが大切だ。

◆ 偏差値万能の風潮は、まだ当分続くだろう。大学を頂点とする受験ピラミッドは、学校が日本社会の「階層構成原理」として機能しつづける限り、なくなるらない。しかし、そんな時代がいつまで続くだろう。ある日気がつけば、偏差値がなんの役にも立たない時代が始まっていてもおかしくない。その日に備えて、教育の中身を回復し、充実させていくことが必要だ。

◆ 教育の機能を回復すること。それには学校が、一人ひとりの生徒を恐れずに評価することが必要だ。

そして、一人ひとりの学力を伸ばす（クラス全体の学力を、または、学校全体の進学成績を、ではなく）ために、できる限りの教育を行なうことが必要だ。

学力を評価する。口で言うのは簡単だが、正しく行なうのはむずかしい。たとえば、日本の教育は、つぎの性格の違う三つの試験をきちんと区別してこなかった。どの試験も合格／不合格を判定するが、その基準はまったく異なっている。

- (1) 達成度試験（定期試験）……ある単元を学習したあと、その理解度をチェックする。試験の目的は、理解の十分でない点を発見して、復習することである。
- (2) 資格試験（卒業試験）……ある絶対的な基準を満たしていることを証明し、社会に対してそれにふさわしい待遇（資格）を要求する。試験の目的は、資格を付与することである。

- (3) 競争試験（入学試験）……試験を行なって志願者に順位をつけ、上位から一定の人数を合格させる。試験の目的は、入学者を選抜することである。合格基準は、志願者の動向につれて変動するから、相対的である。

達成度試験と、資格試験は、絶対になくならないし、なくすべきでもない。社会に必要な制度だからである。しかし競争試験は、なくてもよい。それに代わる制度がみつかるならば。

内申書は本来、達成度をあらわすものであるが、それが入学試験に流用されている。すなわち、(1) ↓(3)の混同の例である。かつての共通一次試験（いまのセンター試験）は、出題の方式からして、本来は高校卒業資格試験である。一定基準を境に、それより上位の者に一律に大学受験資格を認めるという運用の仕方が正しい。それなのに、それを二次試験（競争試験）に加算している。(2) ↓(3)の混同の例である。こんな目茶をされたのでは、伸びる学力まで伸びなくなる。

教育の現状を憂い、教育制度を改めようとする、善意の人間は多い。しかし、彼らの大部分（教育の専門家と称する人びとから、教師たち、文部省の役人まで含めて）は、教育についての定見をもっていない。教育についても、試験についても誤解している。さらに悪いことに、本人にその自覚がない。彼らにまかせていては、教育制度をいじくればいじくるほど、事態は悪くなるばかりだ。残念ながら、事態はもう十分に悪くなっている。

教育の規制緩和をしよう。教育を自由化しよう。そうすれば、現実には教育効果をあげたカリキュラムや教育機関が、そうでないものを駆逐でき、生徒や親に支持された学校が勝ち残っていく。偏差値万能信仰、文部省の政令や規則の締めつけが、これ以上教育を悪くするまえに、教育をわれわれの手に取り戻そう。

それには、どこから手をつければよいのか？ まず、大学の入学試験をなくすことである。大学入試は、なくすべきだし、必ずなくせる。これは別の機会に提案した（一九八九）。そして、文部省が教育から手を引くことである。ここで挙げた七つの誤解に目覚め、ふっ切れた読者の方々は、この方針が正しいことを理解するはずだ。

橋爪大三郎 1948年生まれ。東京工業大学教授。著書に「言語ゲームと社会理論」をはじめ「構造主義」「性愛論」「橋爪大三郎のクショニー身体論」「性空間論」「旧制度論」「大問題！」「橋爪大三郎の社会学講義」。

【参考文献】

- ▼橋爪大三郎「これで大学入試は全廃できる」『中央公論』12月号（一九八九）六四―七二、中央公論社
▼内藤朝雄「いじめ・全能感・世間」「人間と教育」七一九五―七〇一八二、労働旬報社